
代名詞

影楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代名詞

【コード】

N3351D

【作者名】

影楼

【あらすじ】

「貴方」は一体何を思っているのか。チャットで有り得そうであまり見ない変な話。

夏未「ねえ龍、明日も来れる？」

龍「ああ、もちろん来るよ」

ここはチャットの中。

皆が集う憩いの広場。

私たちの初めて出会った場所だった。

夏未「じゃあね、バイバイ」

龍「ああ、バイバイ」

出会いは8月。

私が初めてここに来た時、龍が優しく出迎えてくれた。

初心者だった私は龍から色々なことを教わった。

そして龍に恋した。

だから一度でも良いから龍に逢ってみたい。

そんな事を考えていた。

次の日も私はチャットに来ていた。

もう毎日の習慣になってしまっていた。

龍に逢える事が嬉しかったから。

夏未「龍…遅いなあ」

龍「ごめんごめん、ちょっと遅れちまったな」

夏未「遅かったね、何かあったの？」

龍「今日の飯山盛りでさ、腹痛くて休んでた（笑）」

この幸せな時間から抜け出したくない、例え何があっても。

でもそんな妄想が叶う筈もない。

だからあえて話をしてみる。

夏未「ねえ龍、二人で逢ってみない？」

龍「急にどうしたんだ？」

夏未「龍の顔見てみたいなあって（笑）」

龍「俺は別に良いよ、夏未の顔も見てみたいし」

彼も私も住んでいる所は近い。

逢って見ると言うのも簡単な事だった。

夏未「じゃあ場所は、……公園で良いかな？」

龍「オツケー、時間は2時ぐらいで良いか？」

夏未「うん、じゃあ明日逢おうね」

私は彼の本名を知らない。

顔も、声も。

龍「俺黒いコート着て来るからよ」

夏未「私は黄色いコートと蒼いスカートだから」

龍「おう、見つけた方が声掛けるって事で」

彼も私の本名を知らない。

同じく顔も、声も。

私の妄想は希望へと変わる。

貴方と逢いたい、貴方と話したい。

龍「んじゃ、明日の準備すつから」

夏未「うん、バイバイ」

龍「じゃ、明日な」

楽しい時間はやっぱり続かない。

でも、明日逢える。

貴方と二人で…。

私は待ち合わせ場所に来ていた。

少しでも早く貴方と話したいから。

「……夏未？」

「あっ、こんにちは」

少しだけ恥ずかしい。

想像通り彼はカッコ良かった。

「立ち話も何だし、座ろっか」

「うん」

彼も、私と同じように戸惑ってる。

考えて、照れて、笑って。

そんな貴方が私は好き。

「あっそっだ、名前なんて言っただ？」

「私は佐倉衣未奈だよ」

「佐倉衣未奈か…っと俺は悠稀紅龍、よろしくな」

「…なんかカッコ良い名前だね」

貴方は笑ってくれる。

だから私も笑える。

貴方が居たから私はここに来れた。

だから、私は言う。

「あの……」

「なんだ？」

「前から……その……好きでした」

「……俺も好きだったんだ、でもいつ言おうか迷っちゃってて」

「……えっ……」

やっぱり、考えてる事は同じ。

似ているから好きになったのかな。

「……俺と、付き合ってくれないか？」

「………うん、喜んで」

私が言うべきだった事を彼が言ってくれた。

今の私は幸せ。

貴方と一緒に話したい。

貴方と一緒に在りたい。

貴方と一緒に歩みたい。

貴方は優しいから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3351d/>

代名詞

2011年1月16日07時30分発行